光明

第十卷第九號

この信心をは
まことのこゝろとよむうへは
凡夫の迷心にあらず
またく佛心なり
この佛心を凡夫にさづけたまふとき
信心とはいはるなり。

【最要鈔】

大眞日本宗　光明園本部發行

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）

大正十四年七月一日（第三種郵便物認可）
昭和三年九月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第拾卷第九號　【定價金拾錢】

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に憫む、されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ皆無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、眞まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の內に流れたまふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に經流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我親謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、啓勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀與褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛親謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

◆卷頭の叫び◆

私は今たしかに生きてゐる。
何をすればいいのか。
私にもやがて死が來る。
このまゝ死んでも悔ひはない。
かうした衷心の願求に答へるものは何か、
それは『眞實の敎』である。
眞實の敎は決して人間の便宜で作られたものではない。
如來の胸底から流れ出た聖なるみこゝろである。
我が前に立ちます、善知識こそ、
この聖なるみ旨を傳へたまふ佛の使よ
合掌して受けん聖なるみ旨を、
我が胸底に信の血が動く。

東岸發遣

住岡狂風

本文

『此念を作す時、東の岸に勿ち人の勸むる聲を聞く。仁者、但決定して此道を尋ねて行け必ず死の難なけん、若し住まらば卽ち死せん。』

眞實の敎を說く者は應化の如來であります。地上の敎主釋尊の見方にも色々あります。佛敎に歸依しない人たちから云へば、彼も人間だと云ひます。人間の中の一偉人にすぎない。一聖者にすぎないと、申します。確かに釋尊も肉体を持つた以上、地上の人間の一人だと云ふに間違ひはありません。然しそれは冷たい見方であつて、我と何の關係もない見方であります。この見方はあまりにも平凡であり、常識的であり、冷淡であります。第二の見方は、釋尊を得道の菩薩として見るのであります。この見方では釋尊は我等の尊い先達であります。第一の見方のように平凡ではありません。佛敎の圈内にはいつた人であります。釋尊は我等のよい模範である。手本である。我等も亦彼の如く眞如を体得して煩惱生活を聖化しなくてはならない。聖道自力の人たちの眼には、釋尊はかくの如く地上の得道者であり如來ではあらうけれど、まだ自分と切つても切れぬ一なる關係においての釋尊ではありません。だから聖道門の人の中には『釋迦何人ぞ、我何人ぞ』と强く出る宗派もあります。その見方はいいように考へられますが、しかし其處には棄てきらない我をもつて佛敎に望む臭味はありますまいか。由來聖道諸宗の人たちがたつた一の聖を獲得するのに行詰るのはこれがためではありますまいか。

第三の世界では、釋尊は單なる人でもなく、求道の典型でもなく、私と一つなる流れに立つて、私に眞實の敎を說きたまふ敎主であり、大善知識であります。私の救はれてゆく道を私に示したまふ眞實なる敎を說いて下さる應化の如來であります。彼は

決して地上において得道した一菩薩ではありません。私を救ふ本佛の願海に浮んで、いいに本佛そのものが應現したまふて一切衆生を救ひたまふのである。本佛のみ心を傳へるために、光の國を其背景にして我等の前に立つて聖なるみ旨を我等に示したまふ大善知識であります。

二河白道の講話がだん〳〵進みまして、本號では東の岸の發遣のみ言葉を味はして頂きます。こゝに『東の岸に忽ち人のすゝむる聲』とある人とはこの應現の釋尊、大善知識としての釋尊であります。

一人の旅人がある。彼は曠漠たる無人の廣野に歩んだ。すると彼は後からも横からも群賊惡獸がせめよせて來る。前に逃げようとすれば、火の河が左に、水の河が右にあらはれた。その中間には一すぢの四五寸のはゞをもつた白道が見える。

寂しい孤獨の求道者は『私は今後へかへるとも死ぬる。先きにむかつて行つても死ぬる。とゝまつても死ぬる。』と絶對の行詰りを感じます。この行詰りから脱しようとして死者狂ひで、あせります。彼はたゞ一節の白道に足をかけようと自力をかけて決心します。しかしそれはまだ決して、眞實の如來の勅命に信順したのではありません。(前號の大要)

しかしかうした念ひをなす時、彼ははじめて、教主のみ教を聞くのであります。『忽ち……人の勸むる聲を聞く』「忽聞」とありますが、此時はじめて發遣の聲がおこつたと云ふのではありません。眞實に聞かなかつたのであります。聞いても、眞實に聞かない者は、聞かないと同一であります。云葉をば聞くことも出來ます。お經もこれを讀むことは出來ます。しかし讀んでも聞いても、おちつけないのは、眞に聞かないのであります。眞に聞くとは、信ずることであります。聞くことゝ、思ひとが、一つである時、それを信ずるといふのであります。『信は聞と思より生ず』とはこのことであります。聞く教へと、我等の思念の世界とが同一のものにまでなつた時

信は成立ちます。聞くことなしの思念は獨斷であり迷執であります。然し思念のない聞も亦、完全な信ではありません。

ですからこれを裏から云ふならば、信の世界にはじめて、發遣の善知識と、招喚の大悲とを信知するのであります。信のない者には善知識も招喚の如來もありませぬ。

彼は今や、東の岸、すなはち我が前に、私と共にたちます釋尊の發遣のみ聲を聞いたのであります。

發遣

『仁者たゞ決定して此道を尋ねて行け、必ず死の難なけん、若し住まらば、即ち死せん。』

これが即ち發遣の聲であります。

仁者とはこの念をなす所の我であります。

『但決定して此の道を尋ねて行け』「但決定して」とは如來の名號を聞いて、信心歡喜すること、一念の信の意味であります。

『此の道』とは願力の白道であります。南無阿彌陀佛であります。

『尋ねて行け』道の如く如實に決定して直ちに進めとの意であります。

『心ず死の難なけん』とは、如來の大悲を信じてみ名を廻向せられた者は、即得往生住不退轉の身にしていたゞくことであります。

『若し住まらば即ち死せん』とは若し、住まつたり、後にかへつたり自力の世界にゐるならば長く生死の苦海に惱むであらうとのみ心であります。

このみ教の中心を決定において今少し考へてゆきます。

眞實の教

大無量壽經は、釋尊の出世本懷の經であります。若し大經一部がなかつたならば、

恵まれぬ、凡夫、愚者、悪人、大地の上の一切群生が救はれてゆくことは出來ませぬ人ごとではない私の救はれてゆく道はないのでありました。

眞實なる教によらずして、どうして眞の道がありませう。大無量壽經は、親鸞聖人によつて見出された、たつた一つの眞實經でありました。

『遇ふ』といふことほど困難なことはない。遇ふといふことほど不思議はない。聖人は遇ふことを大變によろこばれた方でありました。『釋迦如來かくれまし〳〵て二千餘年になりたまふ。正像の二時はをはりにき、如來の遺弟悲泣せよ。』大聖の去ること遠くして、大地の上の生をうけたことが、どれほど聖人のみ心を痛めたことであらう。

印度の昔の物語が思ひ出されます。釋尊が御誕生の時、占者たちは、この太子は王となれは轉輪聖皇となつて四海に光被するであろう。若し出家すれば、佛陀となつて世間の苦惱を救はるゝであらう、との豫言に父王淨飯大王は、大變心をいためられ、

當時有名なる、阿私陀仙人をよんで占はされると、彼は、サメ〳〵と天を仰ぎ、地に伏して泣いた。大王はその理由をとはれると、彼は『瑞相ゆたかなるこの太子を眼のあたり見ながら、太子成道よりも三年早く地上を去らねばならない。あゝ、正法にあふことが出來ないのが悲しう御座います。』あふことが出來ない。それが彼の大悲泣の理由であつた。

然るに親鸞聖人は御本典總序に『遇ひ難くしていまあふことを得たり聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。』と眞實教にあはれたよろこびを衷心から感謝してゐられます。あふことに對する價値感、それがなくしてどうして信が開けませう。

今の今、私は、唯一の眞實教を聞いた。聞くことさながらに道がはつきりする。救はれてゆく道がわかつた。これに增したよろこびが何處にあるだろう。

その眞實經たる大經の上卷には、如來正覺の因果がとかれてあり、下卷にば衆生往生の因果がとかれてあります。

上卷は如來の本願が中心であり、下卷に於ては、本願成就の御文こそ私に一番直接の御敎であります。

本願成就文に曰く

『聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心回向。願生彼國。即得往生。住不退轉。唯除五逆。誹謗正法。』

『諸有衆生、其の名號を聞きて信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。彼の國に生れんと願ずれば、即ち往生することを得て不退轉に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。』

と讀みます。一切衆生の救はれてゆく道はこゝに、はつきりと示されてあります。東岸の發遣とは、實にこの本願成就文のみ敎に相當じます。

聞即信

『其名號を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。……』

聞……信……聞くことゝ信ずることゝ二つの事實があるのではない。聞はそのまゝ信である。如實に聞くことがそのまゝ信ずることである。聞……即……信が他力の信である。

名號を聞くとは如來を聞くのである。如來本願のありたけを聞かせて下さる者が、應化の大善知識たる釋尊である。

『仁者たゞ決定してこの道を尋ねて行け……』

この道とは本願の大道であり南無阿彌陀佛であります。この對對他力の本願の大道に乘托して、そのまゝゆけ、如來の金剛の信心がそのまゝ、行者の金剛の信心である決定するとは、行者が思ひかためることではなくて、如來を聞くのである。聞くことによつて、回向せられた一念、それが眞の決定である。

決定

決定とは腹が定まることであります。二つも三つも道を持たぬことであります。決定心のない者は迷ひます。

『涅槃の眞因はたゞ信心である。』とは祖聖によつて示された、はつきりとした決定であります。信心とは、凡小のはからひで、思ひかためたり、つくろうたり、飾つたりした部分的に構成れたものではなくて、全人の自覺であります。如來の本願そのものの廻向顯現であります。炭におこりついた火そのものが信であります。全人格をあげて南無阿彌陀佛になることであります。決定と云つてもこの南無阿彌陀佛をおいて外にあるのではありませぬ。

『其名號を聞いて、信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心に回向したまへり……

……』

眞の決定は、如來の至心に廻向したまへることによつて成立ちます。如來が如來の生命を廻向する……それを其まゝに、受けとらして頂く所に、白道は開かれます。如何にして白道に足をかけようかと、もがく間、その白道は眞の白道ではありませぬ。眞の白道は、聞くさながらに疑雲の去りゆく所、我等の現前脚下に廻向せられてあります。善知識のみ教のまゝ我等の胸底に信心決定は開かれて來ます。

久遠の旅人は今、貪瞋二河の中間にかくして白道を與へられました。

『必無死難』……必ず……死の難……無けん……』

この一語、我等は確固不動の信に導かれます。力强い聲であります。間違ひないぞ白道の上に死の難はないのだ。

死の難がないとは、即得往生、住不退轉の意であります。一念の信決定すれば、その時、即得往生であります。救はれるのであります。

『平生のとき、善知識のことばのしたに、歸命の一念を發得せば、そのときをもつて

娑婆のをはり臨終とおもふべし。』とは執持鈔の御云葉であり、『金剛の眞心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超にる』とは信文類の御教示であります。かくて此の金剛の信心の獲得者は、不退轉に住します。あともどりはないのであります。再び生死に沈没の難なく、彼は生死を超に、墓場を越にて涅槃の都に往生してゆきます。

この東岸の發遣のみ聲を聞いた者は、同時に本佛の招喚のみ聲にふれるのであります。それは次號で述べます。（つゞく）

愧ずることなく、烏の如くあつかましく、他を傷め、强暴不敵にして汚れたるもの〻生活は易し。

愧ずる心あり、常に清けさを求め、物に執着なくおだやかに清淨の生活をなし智慧あるもの〻生活は難し。（法句）

幼き日の追憶

住岡狂風

『先生！　私の心は疲れました。私の魂は荒んでしまひました。こうまで荒び、かうまでだらしなく、かうまでずるい姿ではなかつたのです。どうしてかう墮落したのでせう。歩む力もございませぬ。

△△子様、變りましたね。あなたが此街に出て來たのは、そんなあなたになるためではなかつた筈です。大きな希望と使用を考へてあなたは家のために兄弟のためにまた自分のために來た筈です。それだのに、あなたも弱い人の子でした。もとはあなたは純な人でした。清さを求める精進の人でした、

×

『先生！　それが近頃は、自暴自棄になつてしまひました。魂は固く〳〵氷つてゆきます。清さを求める心も失せてゆきました。希望も光もなくなつて、今日一日生きてゐるさに無意味です。

『先生！　妾はこゝに來ると早々に戀を知りました。そしてその戀は男生の勝手のため、ふみにじられてしまひました。しかしその悲しさも大分靜まりました。

×

△△子樣！　泣くのをおやめなさい。一緒に考へませう。

考へる力も御座いません。妾なんかもうどうなつてもいいのですから。ほつておいて下さい。

×

それは正しいあなたの心ではありません。すねた態度です。まつすぐい心の延び方を忘れて、まがりくねつてゐるのです。それはいけないことです。自分の魂を尊んでやらないで、自分を自分で輕じたり、卑下したり、することはよいことではありません。『妾などは其尊さを失つたといふのかも知れません。』それは間違つた考へ方です。

×

先生。しかし私にはもうはれやかだつた昔の憬れの日の清さはありませぬ。もう駄目です。ほつておいて下さい。

ほつておくのおかないのとそんな問題ではありませぬ。

×

私どもはこれだけは信じてもいいと考へます。それはね、

『どんなに、たゞれた罪の子にも、どんなに沈んだ墮落の底にも、新らしい光が生れて。生れ變り得る時と光とが惠まれる。』と云ふことです。

明日は死刑になる人にさへ、肉も体もたゞれきつた賣春婦のなれのはてに立つ女にも、求めさへすれば新らしい日は惠まれねばなりません。それは私の魂の聲なのです

×

先生！　それには妾は、人の世の汚さと、人間性のだらしなさとを知りつくしたのです。

×

それだから臥目だといふのでせう。それは限違ひです。汚さを知らなかつた昔のあなたは、亡ぶべき美と、亡ぶべき幻影とをよろこんでゐたのです。それは咲いた花の美であり。處女の清さです。花の美も處女の清さも、それは散らねばならず。失はれねばならぬ清さであり、美であります。亡ぶ清さや美しさの上に立てられた人生しか知らない者は、一度はびつくりしなくてはなりますまい。

あなたはさうした一切を失つたのです。しかしそのこはれた一切の中から、燒けた灰の中から、新らしい何かゞ生れることは約束されねばなりませぬ。子供だけの持つ素純さや、可愛さは亡ぶべき運命のものであります。あなたも、さうした美と清さと憧れとの一切がなくなつたのです。處女にもなれず、子供にもなれないかも知れませぬ。大地の上の眞相について深く知つたこと、あなた自身の全部について知つたこと

は、それが或は、あなたのためにはいいことかも知れません、あなたの前半生が灰になつたのです。しかし其灰は、やがて芽生にるあなたの心の芽の肥料になるかも知れませぬ。

×

先生！　私は私の心をながめた時、かうまで悪質な私であつただらうか、ずるい私であつたであらうかと驚かずにはゐられませぬ。いいに、口でいふだけで、心はちつとも動きませぬ。私はもう駄目なのです。

×

△△子様、荒んだ心には誰でもたにられません。自分では好まないのに宿業力にひきづられて暗い深淵におちてゆくのです。自暴自棄の態度は一層この暗を深めます。

×

私の全体はかうして暗の底へ〳〵とおちてゆくのです。私はもうどうなつてもいいとさに思つてゐました。しかし先生と話してゐるとこれであつてはならない。どうにかしたい心持の芽がめばえて來ます。晴さ、明るさをにらむ心の願求がはつきりとして來ます。さうなれば、私はたまらなく苦しい悲しい心になります。たにられませぬ私はたゞれはてゝゐるのです。

×

△△子さん……

あなたの故郷には河がありましたね。家の横の小川には水車がありましたね。さうして裏の山には、青い草叢になつた山があり、雜木が茂つてゐましたね。初夏には白

百合が露の中に咲き、秋の日には女郎花や桔梗が咲き乱れてゐたことでせう。

×

先生！　私は長い間故郷の山河を忘れてゐました。あのなつかしい山も川も田も思ひ出されます。私の一番の友であつた信子さんと二人で毎日のように遊んだ、櫻の木の一本ある野邊も思ひ出されます。あの時の純な日がなつかしまれます。

×

故郷のことを思ひ出すと、誰でも幼い日を追憶します。親のこと兄弟のこと友だちのこと、それと一緒であつた幼い日の思ひ出、それはなつかしいものであります。

×

先生！　お話を聞いてゐると様々なことが、様々な日が思出されて來ます。思はず泣いてしまいました。御免下さい。

×

△△子様！　貴女の顔色は變つて來ました。晴々しく輝いて來ました。

×

先生！　不思議です。妙に明い光がさして來たような氣がします。私は私の心の願ひがはつきりとして、かすかなよろこびと、力とが惠まれたような氣がします。

×

『嬰兒の如くなれ』といふことはある眞理をふくんでゐます。しかし成人が子供にな

ることは出來ません。けれども幼き日を追憶することは出來ます。幼き日の追憶、故郷の思出は私どもの固まりやすい心、頑なゝ心を、柔かにしてくれます。純な心が芽ばゐると申しませうかね。

信仰の心もかうした心地と似通ふてゐると思はれます。故郷を思出す、幼時を思ひ出すそのこゝろをもつと深めてゆけば、そこにお淨土や如來が、あたゝかくうなづけると思ひます。久遠の故郷にかへりゆく心、その久遠の故郷の親樣におあいする心、それはなつかしいものであらねばなりませぬ。三毒の業火に燒きたゞされた、韋提希夫人に、釋尊は靜に、除苦惱法をおときになります。

『韋提希よ、他の方に心を乱されずにあの太陽が金色まばゆく悠々と沈む日沒を思はふではないか。赤い陽が鼓をかけたように沈んでゆく、あの日沒の莊嚴さだよ……そこにお前の靈の故郷が思はれよう。』

このように說かれ、次ぎ〳〵に水を想ふこと、地を想ふこと、寶樹、寶池、寶樓と色々な觀想をとかれて、さうした後久遠の本佛、阿彌陀如來に會はしてゐられます。

おそらく故郷を思ふ時は、親を思ひ出すでありませう。心のはなれ〴〵の兄弟も、幼時を、父母を、故郷を、思ひ出す時一つに結ばれてゆくのです。

×

先生有たう御座いました。心が輕くをちついて來ました。如來より遠ざかり、念佛を忘れてゐた私はまたよびさまされた心が致します。つとめさせていたゞきますあゝ今迄は間違つてゐました。これからです。どんな苦しみも忍べる氣がします。もうぢつとしてはゐられませぬ。有難う御座いました。

有難う御座いました。私も貴女と話してゐてはつきりしたようです。では、時々故郷のことを思ひ出しては、心を囚から放たれて生きてゆきませう。

美しいもの

住岡狂風

地上の美しいもの……と書いて孝へます。

美しいものは澤山ありませう。其中で尊くも美しいものは、一切の苦を背負ひきつて、忍終不悔の生活をつゞけてゆく人のすがたであります。

夫に早く死にわかれた妻が、子供をつれ頑固な氣短かな老人をつれて、せつせと働いてお米にしつゝ、默つたまゝで生きてゆく。一波去れば又一波、つきせぬ苦惱がおしよせる。『苦は負ひきるより救はれる道はないのだ』その確心さえ出來たら、女でも強い。

私はあなたにたのみます。どうぞ、老人を見て下さい。どうぞ子供を育てゝ下さい女ですもの、外からの誘惑もあるでせう。心のうちにも男生にひかれる力にも強いられるでせう。しかし戰つて下さい。子供のためにあなたの全部を捧げて下さい。處女の美は花の美です。風が吹いたら散つてしまひます。永遠性はありませぬ。しかし母性の美は永遠です。老ひてゆくことによつて亡ぼされは致しませぬ。

子供に捧げきつた母性愛はあなたを強い女にするでせう。

母親に逃げられた兄妹二人が、日暮れ〳〵にかどに立つて、夕陽をながめて涙する『お母様はどうしたのだろう。』私はそれを聞いてたゝられませんでした。

□

法藏菩薩の御念力は、一切の苦惱を背負ふて合掌して立つた時、はじめて信じさせて頂きます。苦を負ふてゆく力、それこそ信の力でなくてはなりませぬ。合掌歸命の歩みの上に如來の魂がうちこまれてあります。息の根のとまるまで如來樣と一つになつて苦の一切をおはして頂きませう。

□

絶對他力教は責任をはづして逃げることを教へませぬ。從つて極樂は、犯人の高飛び式の逃げ場所ではありませぬ、本願の生治をさせて頂く者の心の本國であります。法藏菩薩の成就された本國であり、釋尊の本國であります。本國から私の上にさしのべられた如來のみ手が本願であり、私の相を赤裸々に照す光明が智惠であります。如來は智慧と慈悲によつて、私の心を囚はれから救ひ、疑ひから開放して、本願の白道を歩ませて下さいます。

しかし私どもはどもすれば白道を見失ふては、高慢になつたり。虛假に陷つたり、卑下したり、愚痴をいつたりしては、自分のすがたを見失ひます。そんな時には、自分の全体を背負つて立つことを忘れてゐます。

□

どんなに墮落しても、おちこんだ谷底から光をながめることを忘れてはならない。どんなに苦惱の谷間からでも罪惡の深淵からでも眼さへ天上にそゝげば、きつと月は見ることが出來るであらう。

□

或る時、山中に大火事が起りました。火は勢すさまじくひろがつてゆきました。多くの獸たちは逃げてゆくことに死者狂ひになりました。しかし逃げようとすれば、深い溪谷になつてゐて容易ににげることが出來ませぬ。猛火は次第に背面からせまつて來ます。多くのけものたちは泣き狂つても、救はれません。何とも致方なく困りぬいてゐる時。一匹の大きな鹿が現はれて來ました。彼は向ふのがけとこちらの山とに、

前の二足と後の二足とで、溪谷の上にふみまたかつて橋の形となり、一同にむかつて

『一時も早く、皆我が背を渡つて逃げよ早く〳〵。』

とせきたてました。群がる獸たちはよろこんで、先を爭ふて鹿の背を渡つてのがれました。無殘にも鹿の背は、皮は破れ、肉はちぎれ、血潮はだら〳〵と流れて全身を染めてゐます。

哀れ力つきて彼は動くことは出來ない。其時最後に一匹の兎がにげて來て助けを求めました。鹿は早く渡つて逃げよと云ひました。兎が渡つてしまつた時、彼は力つきて溪間におちて哀れな死をとげてしまひました。

この大きな鹿とは釋尊の全身であり、兎といふのは、須跋陀羅といふ長者の前身であります。釋尊が八十の老齡となり、涅槃の雲にかくれようとする時、病重くして、談話さゐむつかしい。其時最後にはせ參じて道を求めたのは、須跋陀羅である。阿難は病が重いので彼は申出をことはつた。しかし釋尊かそれを聞かれると、彼をよんで最後の說法をされた。彼は解脫することが出來た。彼の前身は山火事の時の兎だと云ふのである。

一切を渡す鹿、だまつて考へたい。
眞實はどんなさゝやかな生活の中にでも光る。
さうして眞實の輝きほど美しいものはない。

舍利弗と目連（三）

或日又舍利弗は語るやう。
比丘等よ正見々々と人々は云ふが如何にすれば佛の弟子は正しい見解を持ち厚い信

仰に入り正法に達したと云はれるのであらふか？

比丘等よ、佛の弟子にして不善を知り、不善の根を知り、善を知り善の根を知れば それだけ正しい見解をもち法に對して厚い信仰に住しこの正法に達したのである。そ れならば不善とは何か？　そのほか不善の根、善、善の根とは何であるか？

比丘等よ、殺生　偸盜　邪婬　妄語　兩舌　惡口　綺語　貪　瞋　邪見は不善と云 はれ、貪欲、瞋恚、愚痴が不善の根と云はれるのである。又前の十不善をはなれ、正 しい見解をもつことは善と云はれ、後の貪欲等の三毒をはなれることが善の根と云は れる。こうして不善と不善の根と、善と善の根とをしり、すべての欲と害する心とを はなれ、我見の煩惱をとり、無明をほろぼし、今現在にて苦るしみの跡を斷つならば その人は正しい見解をもち厚い信仰に住し正法に達したのである。

比丘等は喜こんで敎をきいてゐたが、更に問ふよう

『この外に佛の弟子が正しい見解をもち厚い信仰を具へ正法に達する道があろうか。』

舍利弗は答へて

それはある。もし佛の弟子にして食を知り、食の因を知り、食の滅を知り、食の滅 に至る道を知らば、それは正しい見解をもち、法に對して厚い信仰に住し、この正法 に達したのである。その食の滅に至る道とは、すべて生物の身と心とをもち未だ生じ ないものゝ生じる助けとなるために四種の食がある。粗細の團食と、觸食と思食と、 識食とである。そしてこの食の因は渴愛からであるから、これによつて食がある。渴 愛がほろぶ時に食はつきる。八支聖道即ち、正見　正思惟　正語　正業　正命　正精 進　正念　正定はこの食の滅に至る道である。それゆゑに、佛の弟子がこのやうに食 の滅を知り、食の因をしり、食の滅に至る道をしり、すべての欲と害意を去り、我見 の煩惱を消し、無明をほろぼし、今現在にて苦の終りをなすならそれは正しい見解を もち、法に對して厚い信仰に住しこの正法に達したのである。

このことは苦惱についても同樣であつて苦を知り、苦の因を知り、苦の滅を知り、

苦の滅に至る道を知れば、それも正しい見解をもち法に對して厚い信仰に住し、正法に達したのである。

生　老　病　死　愁　悲　苦惱　又は求めて得ざるは悉く苦である。要するにこの生きてゐることが苦であり、未來の迷ひを引きだす渇愛はその因であり、この渇愛がほろぶれば、それは苦の滅であり、正見等の八正道は苦の滅に至る道である。』

比丘等はこの舍利弗の敎を非常に深く喜んでききました。

目連と惡魔

或る時、目連は獨り跋伽國のスンスマーラギリに近い恐怖林鹿野苑に滯在してゐました。或日露路を靜に歩いてゐますと目連の腹の中に、惡魔がそつと入つて姿をかくしました。目連は腹の中に豆の樣な重い塊を感じて、我室にかへり思惟をめぐらしてそれが惡魔である事を知つて、云ひました。『惡魔よ出でよ。如來と如來の弟子を擾してはならぬ。汝の永劫の不利益となるからである。』

惡魔は思ふよう。『この沙門は私を見付けないで出でよと云つてゐる。この沙門の師匠でさへ、そんなに早く私をみつけることは出來ないのであるから。弟子がどうして私をみつけることが出來よう。』

目連は重ねて云ふよう。『惡魔よ。私は汝を見つけてゐる、汝の思ふてゐることも知つてゐる。』惡魔はおどろいて目連の口から出でて戸の棧の上に立ちました。『惡魔よ。汝は私が汝を知らないと思ふてはならない、汝は今棧の上に立つてゐる。遠い以前、私も頭尸と呼ばれる惡魔であつたが汝は私の妹の迦利の子であつた。その時には覺參陀佛の御世であつたが佛陀には毘頭羅、參待婆といふ二人の大弟子があつた。毘頭羅は智惠勝れて說法が巧みであり、參待婆は定に巧で、想受滅定に入られると町の人々は、尊者の死だと思つて葬式をしたほどであつた。尊者は夜明けに定を出で、堆ねた柴の火を拂ふて、鉢を持ち托鉢に出られたので。町の人々は生きて居られ

るのであつたと初めて知つたほどであつた。

惡魔頭戸は或る日、思ふやう

「私はこの戒行の正しい比丘達の來る所も去く所も知らない。町の人々の心に入つてこの比丘達を謗り惱ましたならば、比丘達の心が亂れやうから、その機會を捉へて見よう。」

町の人々は比丘達を罵つた。

「髮の毛のない汚い沙門、贅澤な黑い遊び人、梟が樹の枝に止つて、下の鼠をのぞき込んでねらつてゐるやうに、始終下を向いて物探しをしてゐる遊人、」こんな惡口をしたものは皆死んで後に地獄に墮ちた。

佛陀は比丘等に敎へ給ふやう。「これらの誹謗は皆、惡魔頭戸のなした業である。比丘等よ。慈の心、喜びの心、平等の心を養へよ。」

比丘等はこの敎を聞いて心動かさず森に入つて四無量心を修めてゐた。

惡魔頭戸は、この樣に誹謗の手を用ひても、機會を得る事が出來ないので、改めて町の人々に供養と尊敬を捧げしめた。供養と尊敬を捧げた人々は、死んだ後に、多く天界に生れた。

佛陀は比丘等に敎へ給ふよう、

「これらの供養と尊敬とは惡魔頭戸のなす所である。心を動かして機會をあたへてはならない。汝等不淨觀を修め、生の苦を見、無常を想ふて、住せよ。」

比丘等は供養と尊敬とに心を動かさず、苦空無常無我を觀じて道を修めていた。

惡魔は二つの金が効を奏せなかつたので、或日、佛陀が毘頭羅を連れて、托鉢に町に行き給ふ途中、或子供の心に入つて、陶器の破片を取りて、毘頭羅の頭になげつけた。毘頭羅は痛む頭の血をそのまゝにして振り返りもせず、佛陀に從つてゐたが、象王の振り返るように、佛陀は頭をめぐらして、

「惡魔頭戸は程を知らぬ。」と仰せられた。

頭尸は大地に吸はれて地獄に墮ち、それから限りない時の間、地獄の苦しみを重ねたのである。

惡魔よ。比丘を惱ましてはならぬ。それは永劫に互る汝の不利である。私の惡は私を損はないとおもふのは間違ひである。汝は長い間、惡を積んだ。

惡魔よ！　如來に近づいてはならない。比丘を擾してはならない。』

惡魔は目連に見つけられて、喪心したものゝやうに、そのまゝ姿を消してしまひました。

講演豫定

九月四日――六日　高田郡長田村長圓寺
十日――十三日　安佐郡飯室村
十九日……未　定
十月一日――三日　本部例會
八日――三十一日　備後地方一圓
七日――十日　仝郡吉田町淨圓寺
十五日――十八日　下關市佛教會館
二十八日――三十日　福山市宗教講座
四日――七日　河内町支部

講演の旅

◉八月九日―十三日　第二回本團習會、會場甲町明圓寺。講題、尊號眞像銘文。九日朝一行數名明圓寺に入る。昨日から來た三島、釜瀧君等が準備をしてゐる。山口縣から西村氏、岡山から一行五人、等續々來る。

朝食をすまして朝の講演に移る。朝の講演が八時からはじまる。段々とつめかけてくる。これから五日間毎日、五時起床、六時から七時まで講演、七時より朝食、八時から十一時まで講習、十二時晝食、一時より海水浴、夜八時より十一時まで講演、と繰返へされるなつかしい兄弟たちが集つてきてみな一ぱらになつて樂しいつどひである。一番多い日には旅からきたものが六十名位、なか〳〵のにぎはいである、十三日には高田の長尾哲麟氏がきて一席話される。十四日は一日彦浦で清遊して其夕方福山市へかへる。五日間では短い來年は是非七日にとの希望が多い、嬉しい會であつた。◉十五日姫路東洋紡績、午後二時から二時間、甲番に話し、午後六時から乙番の人たちに話る一住岡先生が來られないのなら、私たちはナポンには國へ帰つてくる」とて駄々をこねると云ふ熱心さ、度重るにつれて、親しさも增し求道熱も盛んになる。渡邊老の骨折りである。夜汽車で福山にかへれば、夜中の三時、四時にねる。◉十六日十七日、神石郡油木町、青年團及び處女會の幹部講習、修養團の講習形式によつてなされた。パンヅにシヤツ鉢卷といふすがた。嚴肅な規律の正しい熱のあるコウシュウ會である、朝五時から夜十一時まで、會員は全部學校へ宿泊、修養團一流の沒我的氣分と青年の意氣のみちたコウシュウ會である。十八日朝八時まで語つて自動車の人となる、雨と風の中を福山に着く。◉十九日　中津原の杉原宅に座談にゆく。◉二十八日より三十一日まで佐伯郡大野村更地中丸さん白藤さんたちの念願から三年ぶりに又來た。三年ぶりといつても本村には度々きてゐるのでみんなゝつかしい同胞たち、嬉しい會である。一里もある鄕から熱心に集る人たちがある。更地の地の底には何物か力强いものが動いて白く光つてゐる。數年十數年、もつとのびよ。もつと光れ、みな一致であの光を追へ

と念じられないではゐられない。一日朝伊藤さんに本部まで送つていたゞいて帰つてきた。◎一日――三日父の一周忌は七日だけれど、例會の日に一周忌の講演會をする、二川凌雲師が講師である。朝八時、夜八時と二回である。二川師は書は大槻外へでる。法藏菩薩についてきいた。父のことが思ひ出される。あのやさしかつた念佛の父が去つてから、月日のたつのは早いものでもう一年になつた。父は幸福な人であつたとつくづく思ふ。幸福な父を持つた私の幸福を感謝せずにはゐられぬ。四日の朝高田郡へ出發する。

◎本部便り

私の最も好きな調落の秋を迎へました。なつかしい皆様には、お變りございませんでせうか。

夏休みもすぎて本部はまた元の寂しさと靜けさにかへりました。去る九日の夜の汽車で吉藤さんも、東京へ勉學の途に旅立ち、昨今はいたつて少人數で、寂しい中にもしつくりした心で、皆それ〴〵精進をつゞけさせていたゞいてゐます。

涼しいそよ風とともに秋を告ぐる虫の音のいとおもひ深ふ胸をおさづれます。昨年の本月七日の夕べ、たくさんの法兄姉の温いお看護のもとに、父が永遠の淨土へと往生いたしましてから、最早や一ヶ年の日と月を經過いたしました。そゞろに生前の父を、懐しみますにつけ、一方ならぬ御恩にあづかりましたみなさまの御厚情のほどを忍び深く感謝いたします。ありし日常に求道精進に余念のなかつた父は、今も尚、聲なき聲で、忘りかちの私を胸深く、むち打ち勵ましてゐてくれます。

昨年から本年にかけてかわる〴〵病氣致しましたり不運續きの爲め、何彼と皆様のご心配にあづかりまして、すまなく思つてゐます。殊に事務の不行屆の爲には、色々御迷惑をおかけ致しました事と存じます。深くおワビ申上げます。

作今はやう〳〵みな病と戦い得て、また元の元氣で働かして頂いてゐます。もう光明の製本に忙しくなつてまいります。ではみな様、御健かにさす〴〵御精進下さいますやうに……

美津子

お願ひ

一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をはつきりお記し下さい。

一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい

一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使ぬようにして下さい。やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。

一。文字をはつきり正確にお書き下さい。

一。主管に特別の用事の外申込中止送金等は一切事務宛に御送附下さい。

一。誌代前金切の時はどうかお早く御送金を願ひますお困りのお方は共旨御申越し下さい。

本誌定價

一部　金十錢（郵税共）
一ヶ年　金壹圓貳拾錢（郵税共）

昭和三年九月十日印刷
昭和三年九月十五日發行

編輯兼發行人　花岡靜人
印刷人　佐々木温三
印刷所　光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地
發行所　大日本真宗　光明團本部
振替貯金口座下關貳參〇八番